

田中雅仁 バスーンリサイタル

MASAHITO TANAKA BASSOON RECITAL

1994年4月21日(木)

PM 7:00開演

東京文化会館小ホール

🌀 プログラム 🌀

フランソワ・ドゥ ヴィエンヌ
(1759-1803)

ソナタ ヘ長調 作品24-3
アレグロ-ラルゴ-ロンド

ノエル・ギャロン
(1891-1957)

レシタティーヴォとアレグロ

マラン・マレ
(1656-1728)

スペインの「ラ・フォリア」

休 憩

パル・カロリー
(b 1934)

コントルニ

ローベルト・シューマン
(1810-1856)

幻想小曲集 作品73

カール・ヤコビ
(1791-1852)

序奏とポロネーズ 作品9

François Devienne
(1759-1803)

Sonate in F Op.24, No.3
Allegro-Largo-Rondo

Noël Gallon
(1891-1957)

Récit. et Allegro

Marin Marais
(1656-1728)

Les Folies d' Espagne

Intermission

Pal Karolyi
(b 1934)

Contorni per Fagotto e Pianoforte

Robert Schumann
(1810-1856)

Fantasiestücke Op.73
1. Zart und mit Ausdruck 2. Lebhaft, leicht
3. Rasch und mit Feuer

Carl Jacobi
(1791-1852)

Introduction et Polonaise

プロフィール

田中雅仁(バスーン)

東京都出身。桐朋学園、ニューイングランド音楽院を最優秀の成績で卒業。後、ボストン大学、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に学ぶ。戸沢宗雄、故S.ウォルト、M.ルジェロ、J.モスタード各氏に師事。

「ハーグ・フィルハーモニー(オランダ)」「南西ドイツ放送交響楽団」「ベルギー国立歌劇場交響楽団(モネ劇場)」「新日本フィルハーモニー交響楽団」各首席奏者を歴任。その間、ソリストとしてもヨーロッパ、アメリカ各地で演奏し『最高のバスーンリスト(フランス)』『最大のヴィルテュオーソ(ドイツ)』との評価を得る。

現代曲の演奏家としても国際的に活躍しており、すでに多くの作曲家から作品を贈られている。特に連続して芸術祭に参加した2回の「現代曲リサイタル」、また、'92年ニューヨークでの現代日本作品によるリサイタルは高く評価された。

また19世紀のヴィルテュオーリックな作品のリサーチ、紹介も積極的に行っており(ドイツBote & Bock社より出版)、その驚異的なテクニックと音楽性は欧米の音楽界が注目し、賛辞を惜しまないところである。

ソリストとして活動するかたわら、「アンサンブル・ラミ」を主宰し、積極的な室内楽活動を行う。また、リヨン国立高等音楽院(フランス)、オスロ音楽院(ノルウェー)、スウェーリンク音楽院(オランダ)など、ヨーロッパの代表的な音楽院より招かれ、指導を行っている。これまでに、故J.プリッチャード卿、故A.フィードラー、F.ライトナー、F.ライヤー等の指揮者、M.ペトリ、M.アリニョン、G.ドゥプリユ、P.ピエルロ、R.ギヨー等多くのソリストと共演。特に「20世紀バレエ団」と共演した「春の祭典」「兵士の物語」(EMIに録音)ではベジャールに絶賛された。CDはEMI、Pavane、Thorofon、ALM、Astoriaより発売されており、世界中で高い評価を得ている。

1994年には、ブリュッセル、トリノ、台北、ニューヨーク等での演奏が予定されている。

児嶋一江(ピアノ)

東京芸術大学及び同大学院修了。第44回日本音楽コンクール入賞。国際ロータリー財団の奨学生として国立ミュンヘン音楽大学留学。同大マスターコース修了。1980年ジュネーブ国際音楽コンクール銅メダル受賞。1981年全ドイツ音楽コンクール第1位。ベルリン、ハンブルク、シュトゥットガルトなどでリサイタルを行う。1982年海外派遣コンクールにて河合賞受賞。1984年ライブツィヒにてゲヴァントハウス管弦楽団と協演。又、メンバー結成175周年記念コンサートとして、ゲヴァントハウス弦楽四重奏団と共演し絶賛を博した。

1991年滋賀県文化奨励賞受賞。海外で活躍する一方、国内では、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などと協演。金沢孝次郎、島崎清、井口秋子、小林仁、クラウス・シルデの各氏に師事。1991年5月デビュー10周年記念リサイタルを開き絶賛を博した。現在、東京芸術大学非常勤講師。コンセルヴァトアール尚美学園ディプロマコース講師。

◇ フランソワ・ドゥヴィエンヌ 「ソナタ ヘ長調 作品24-3」

ドゥヴィエンヌは18世紀フランス最大のフルート奏者、バスーン奏者そして作曲家として今日高く評価されている。幼少の頃から管楽器の演奏に長じ、フルート・ヴィルテュオーソとして名声を得て、パリ国立音楽院の教授となった。彼の著作「フルート教本」は19世紀末までフランスで使用され、現代フレンチ・フルート・スクール確立のための大きな要素となった。

彼はまたバスーンの名手としても知られており、1789年からはオペラ座の首席奏者をつとめた。彼の作品の大半は木管楽器を中心とした器楽曲であるが、モーツァルトにスタイルが似ていることから「パリのモーツァルト」とよばれた。事実、彼のバスーン協奏曲の一つは近年までモーツァルトの第2協奏曲とされていたほどである。

このソナタは「バスーンと低音のための6つのソナタ」の第3曲で、アレグロ、ラルゴ、ロンド／アレグレットの3楽章で構成されている。

◇ ノエル・ギャロン 「レシタティーヴォとアレグロ」

今世紀前半パリ音楽院の教授であったギャロンは、高名なピアノの名手であり、またハーモニーの大家でもあった。ピアニストとしてマルセル・モイーズなど多くの木管楽器の名手と共演しており、作品にもその影響が認められる。この「レシタティーヴォとアレグロ」は当時パリ音楽院の教授であった名手、フェルナン・ウーブラドゥに捧げられた。比較的古典的な作曲法であるが、豊かなハーモニーと流麗なメロディーが一体となったきわめてフランス的な作品である。

◇ マラン・マレ 「スペインの『ラ・フォリア』」

ルイ14、15世の宮廷音楽家であったガンバの名手、マレは器楽、オペラ両分野の作曲家としても知られている。この作品は1701年にパリで出版された「作品集 第2巻」に収められている当時広く親しまれていた「フォリア」のメロディーに基づく変奏曲集である。「ヴィオラ・ダ・ガンバまたはその他の楽器のための」と付記されているように、18世紀初めは特定の楽器のために書かれた作品を、音域や調性を変えて他の楽器で演奏することが習慣となっていた。現在でもこの曲はフルート、オーボエ、ヴァイオリンなどで演奏されている。主題と25の変奏曲で構成されているが、全曲を通して演奏されることは極めてまれである。また通常は無伴奏であるが、通奏低音をつけて演奏されることもある。

◇ パル・カロリー 「コントルニ」

カロリーは1934年、ブダペストに生まれた現代ハンガリーの代表的作曲家の一人である。ブダペスト音楽院とアカデミーで作曲を学び、1962年の卒業と同時に州立音楽院の教授となった。彼の初期の作品は今世紀のフランス音楽、特にオネゲルの影響が大きかった。そして1960年代後半からはヨーロッパ・アヴァンギャルドの作曲家達の影響をうけ、特に器楽曲で新しい手法を用いている。彼にはハンガリーの民族楽器のための作品もあり、また民族楽器的な効果を現代の楽器

で表現することも試みている。

「コントロールニ」は1970年の作品で、「重音」「フラッター・タング」「グリッサンド」等の特殊奏法が自由に使われており、またピアノではクラスターの多用にあわせて、民族楽器、ツインバロンのような効果をねらった内部奏法も用いられている。

〔注〕重音(multiple sound)

複数の音(通常5～9)が同時に鳴るが、これらの音は12音(半音階)にあてはまるものは少なく微分音のものが大半である。またすべてが均等の音量で鳴るわけではないので、音量の大きいものがキャラクターを支配する。カロリーの作品では2つの接近した音の音量とピッチによる「唸り」が効果的に用いられている。(田中雅仁)

◇ローベルト・シューマン 「幻想小曲集 作品73」

シューマンの管楽器のための一連の作品、「3つのロマンス」「アダージョとアレグロ」そしてこの「幻想小曲集」はそれぞれ複数の楽器が指定されている。これらの作品は、おそらく楽器の性能、機構などにとらわれず純粋な音楽的欲求を発展させたもので、その表現のために、あとから様々な楽器をあてはめたように考えられる。従って現在ではヴァイオリン、チェロ、フルート、クラリネット、オーボエ、バスーン等色々な楽器で演奏されている。この「幻想小曲集」はもともとはクラリネットまたはチェロのためのものであるが、音域的にバスーンでも十分に可能であり、演奏されることが多い。3つの小曲から成り、続けて演奏される。

◇カール・ヤコビ 「序奏とポロネーズ 作品9」

ヤコビは19世紀ドイツ最大のバスーン・ヴィルテューオーソであった。コーブルグ宮廷の音楽家として活躍し、晩年はコーブルグ歌劇場の総監督となった。またソロ・バスーン奏者としてヨーロッパ各地で演奏し、大きな成功をおさめた。当時の演奏会記録には彼の優れた技術と豊かな音楽性を賛美する記事が多く見受けられる。

ヤコビの作品は大半がバスーンのためのものであり、当時20曲ほど出版されたが、現在では僅か3曲が1980年代になって出版された。この作品はオーケストラまたはピアノの伴奏によるもので、バスーンの性能が十分に発揮されている。尚、今回の演奏はブライトコッフより出版された初版(オランダのE.ファン・ベイヌム財団所有)に基づくものである。